

西谷火葬墓群

久留米市山本町大字豊田字西谷所在火葬墓群の調査

久留米市文化財調査報告書

第 3 集

1 9 7 1

久留米市教育委員会

西谷火葬墓群

久留米市山本町大字豊田字西谷所在西谷火葬墓群の調査

序

このたび文化財報告書第三集を発行いたしました。

昭和三十七年耳納山産業開発道路建設工事の際、毘沙門岳近くの道路堰さく面から十基に及ぶ火葬墓が発見されましたが、調査のいともなう道路は完成されました。昭和四十五年再び同地付近の森林公園駐車場建設工事で火葬墳数基が発見されました。年度末の工事でもうならない事情ながら、工事の中止を願い、県文化課の指導協力を仰いで急遽調査を実施したわけではありますが、開発と文化財保存の両立のむずかしさを銘々と感じさせる一幕もありました。

幸いに、前回の道路工事の際も、現高良大社の古賀寿氏が、記録もないまま消滅することを傍観するにしのびず、可能な限り調査をされた記録があり、高良山の歴史的背景などとともに執筆を願い、このたびの記録と併せて印刷に付しました。また、このたびの調査は、渡辺課長補佐をはじめ県文化課の方々にたいへんご苦勞をかけ記録をまとめていただきました。序文を借りて厚くお礼を申しあげる次第です。

悠久の歴史を秘めた高良山は、郷土の歴史を語るにここを除いては綴れないような重要な位置にあることは周知の事実ですが、本書をさらに郷土の歴史の解明、理解に役立てていただければ幸いに存じます。

昭和四十六年三月三十一日

久留米市教育委員会
教育長 吉 武 不二男

例 言

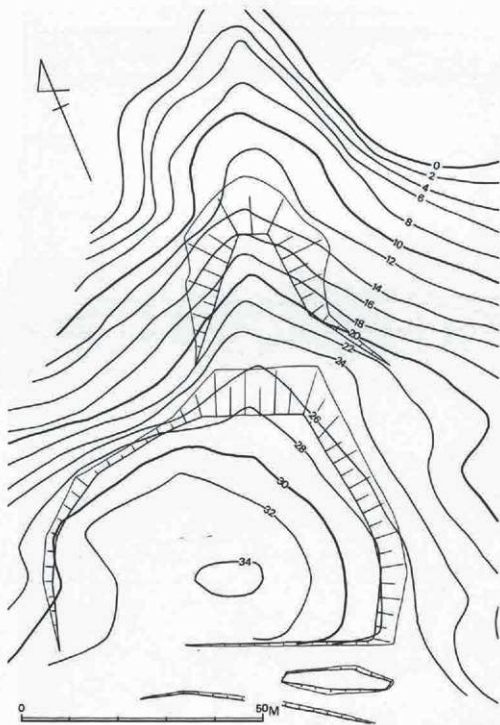
1. 本書は、昭和37年6～7月に古賀寿氏によって調査された火葬墓群と、昭和45年6～7月に久留米市教育委員会主催で調査した西谷火葬墓群の調査報告書である。
2. 本書の執筆は、古賀寿・渡辺正気・宮小路賀宏・樋口一成があたり、末尾に記名し、その責を明らかにした。
3. 掲載の写真は宮小路・樋口が撮影したもので、一部古賀寿氏からも提供を受けた。
4. 掲載の排図は、遺跡地形図及び遺構実測図は、調査参加者の実測によるもので、遺物実測図及び全ての製図は宮小路が行なった。
5. 本書の編集は宮小路が担当した。

本 文 目 次

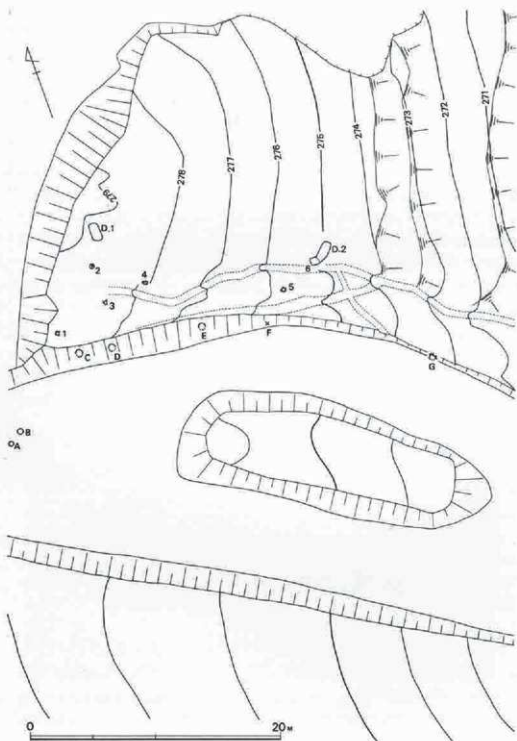
1. 遺跡の位置と環境	4
2. 昭和37年度の調査	
(1) はじめに	4
(2) 遺構の概要	6
(3) 遺物の概要	8
3. 昭和45年度の調査	
(1) はじめに	10
(2) 遺構・遺物の概要	11
4. 西谷火葬墓の歴史的背景	22
5. おわりに	26



第1図 遺跡位置図



第2圖 遺跡付近地形実測図 (久留米市役所実測)



第3図 遺跡地形実測図 (D.1及びD.2は土壇墓)

1. 遺跡の位置と環境

西谷火葬墓群は、福岡県久留米市山本町大字豊田字西谷にある。筑後平野の南にあって、莊嚴な連峰が西流する耳納（水編）山脈の西端高良山毘沙門城（海拔 312m）の北張り出しにある。眼下に筑後川の豊かな流れが蛇行しつつ形成した肥沃広大な筑後平野を一望でき、北に宝満山、北西に背振山が遠望できる見通しのよい位置にある。筑後平野の要所であるこの高良山一帯は、古来より争乱の度この地をめぐる攻防は激しく、政治的、軍略的に重要な位置環境にあった。

高良山周辺には古墳時代遺跡はむろん、国府や上代の神社、寺院等も広く営まれている。例えば北西 4 Km に筑後国府跡、西 1 Km に履仲天皇元年に創建されたと伝わる高良大社、その東に座主の墓地がある。西南 3.5 Km の平野部に筑後国分寺などがあり、平安・鎌倉期の寺院も数多く営まれている。

当遺跡の周辺には同様な火葬墓がある。北東 1 Km に小寺火葬墓群、北 2.2 Km に永勝寺境内火葬墓群、東南 4 Km に杉谷火葬墓、西 2 Km の礪山、東 1.5 Km のかぶと山よりも蔵骨器の出土が知られる。いずれも見晴らしのよい小高い山の丘陵を利用している。以上の地勢を見ると当高良山周辺は、筑後平野の政治・文化の中心であったものと思われるのである。（補口）

2. 昭和37年度の調査

(1) はじめに

西谷火葬墓群発見の端緒は、耳納山産業開発道路の開鑿工事である。即ち昭和37年6月17日ブルドーザー作業中の陸上自衛隊員が通称「三本杉」付近で2基の火葬墓を発見し、高良大社社務所に連絡して来た。偶々社務所に居合わせた筆者は、同社系永新宮司、郷土史家井上農夫氏（故人）と共に早速現地へ赴いたが、その時には更に3基の火葬墓が発見され、同日中に計5基が確認された。最初の2基はブルドーザーの下敷きとなり、殆んど壊滅状態であったが、残り3基は道路の切通し崖面に露出したことと、隊員の注意によって比較的良く保存されていた。蔵骨器には土師器と須恵器の別があり、その器形から見て奈良末～平安初期の遺物と考えられたので、筆者はとりあえず応急調査を行うまで現状を保存するよう作業隊に要望し、蔵骨器は社務所に保管してもらうこととした。但し器内の火葬骨は神社境内に持込むことが許されないので、止むなく三本杉の根元を浅く掘って埋めた。現在慰霊碑の建てられている場所である。

翌6月18日には久留米市社会教育課の係員2名が現地を視察したが、諸般の事情から工事中

止等の措置もとられず、作業はそのまま進められて行った。6月29日、更に1基が発見されたため、筆者は翌30日現地を踏査したが、遺構は殆んど消滅し、蔵骨器のみが社務所に保存されていた。

7月1日、筆者は当時福岡県文化財専門委員であった与崎淳氏の援助を受け、崖面に遺構を留める3基の実測を行なった。この日発見の順位に従って西から東へ番号を付した。

7月10日に至って東端の1基が発見され、合計7基を数えた。或る作業隊員の話では南側道路の切通し崖面（北側）にも、約2m間隔で3基の火葬墓が並んであったというが、無かったという隊員もあり、確認できなかった。

その後7月17日、30日の両度、社務所に於いて蔵骨器の実測図作製、写真の撮影を行なって応急調査を終了した。

道路完成時には、東端の1基を除いて遺構は完全に消滅していたが、やがてその1基の石組みも落ちて判らなくなった。

この応急調査に際しては、糸永宮司をはじめとする高良大社当局、並びに井上農夫・与崎淳両氏より多大の援助が寄せられた。甚だ不十分ながらも、7基の火葬墓を記録に留め得たことはひとえに前記各位の御支援・御協力によるものである。誌上に銘じて厚く謝意を表したい。

（古賀）



第4図 火葬墓発見状態（左—G号、右—C・D号）

(2) 遺構の概要

応急調査の際、発見の順位に従って西から東へ一連番号を付しておいたが、45年度調査の分と区別するためA～Gの記号に改めた。以下A B Cの順に各火葬墓の概要を説明する。

A・B号火葬墓

A・B号は通称「三本杉」の西方、道路の分岐点北側に並んで発見された。両者ともブルドーザーの下敷きになり、上半部は破壊されていた。

A号は円形の土壇中に土師器の蔵骨器を納め、その周囲に木炭を充填したものである。蔵骨器は大形の高台付の壺形と思われるが、上半部は完全に失われて見い出すことが出来なかった。火葬骨の量はかなり多く、破壊された土壇の中に蔵骨器の破片と木炭とが混り合っていた。土壇は残存部の径約50cm、深さ30cmであった。

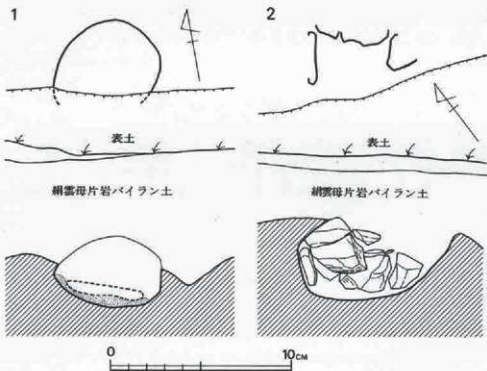


図 3 図 C・G号火葬墓実測図 (1-C号, 2-G号)

B号はA号の東北側に並んでおり、土壇間の距離は約80cmである。これもA号に同じく円形土壇の中に須恵器高台付甕形蔵骨器を納め、周囲に木炭を充填したものである。蔵骨器は破砕されていたが、残った破片で略々原形に復することが出来た。土壇は残存部で径50cm、深さ40cmある。火葬骨の量もA号と同様に多い。

A・B号付近に土師器の高台付杯と須恵器杯の断片が見い出された。須恵器の杯は恐らくB号の蓋に用いられたものと思われる。

C号火葬墓(第5図1)

C号はA・B号の延長線上の崖面に露出したもので、B号からの距離は約7mある。蔵骨器は存在せず、岩盤を長径60cm、短径50cm、深さ24cmの楕円形に掘込み、断面弧を画いた底部に径40~60cm、厚さ5cm程の平石をすえ、その上に火葬骨を盛り、木炭でおおった状態で発見されたという。筆者調査の際は既に火葬骨、平石は取除かれ、坑底に残った木炭層により平石の敷かれた状態が判る程度であった。上部の空洞は発見後剥落したものの由であるが、地表下45cmに達している。表土の下は岩盤の風化せる粒い土層で、断面にも拘らず坑壁は確認出来なかった。

D号火葬墓

C号の東方2.1mを隔てて出土した。蔵骨器は瓶形須恵器の口辺を欠き取り、土師器の皿を伏せて蓋としたもので、器内には8分目位まで火葬骨が満たされていた。発見した自衛隊員の言によれば、上下周囲に石囲いがあり、三角形に近いプランの小石室が営まれていたという。調査の際には石は取り除かれ、空洞をなしていた。坑は半ば近く破壊されているが、岩盤を径30cm、深さ21cmの不整円形に掘り込んだものと思われる。底部の断面は弧を画いている。上部の空洞は地表下32cmに達するが、これが石室の上端であったろう。

E号火葬墓

D号の東方6.9mの地点に出土した。蔵骨器は須恵器丸底の甕に、同じく須恵器の高台付碗を伏せて蓋としたものである。坑は径50cm、深さ18cm程の楕円形に岩盤を掘り込み、底部はC・D号に比べて水平に近い。蔵骨器の周囲に10cm位の厚さで木炭と火葬骨粉が詰っていたという。調査の際は蔵骨器、木炭は取り除かれ、空洞をなしていた。

F号火葬墓

E号の坑端から東方4.96m付近に火葬骨を満した甕形蔵骨器のみが正位に埋納されていたという。蔵骨器は黄褐色を呈し軟質であるが、器内外に特徴的なこう打文が施され、須恵器とすべきものである。土壇は既に削り去られており、調査時崖面に若干の木炭片を認めるのみであった。付近で須恵器蓋の断片1個を採集したが、この蔵骨器に伴うものかどうか明らかでない。

G号火葬墓(第4・5図)

F号出土地点の東南方13.5m、1基だけかけ離れた位置で発見された。蔵骨器は土師器の比較的小形の壺で、出土の際、大破したが、残存の破片により略々全形を知ることが出来る。火葬骨の量は少なかった。遺構は径90cm、深さ45cmに岩盤を掘り込み、西北側の一部は斜めに掘進んでいる。この岩盤に食い込んだ埴の奥壁を基準とし、自然の石塊を以て小石室が営まれていた。石室は半壊の状態であったが、方形プランと推定される。石室の径は底部で40cmであった。岩盤の掘込みが他の3基(C・D・E号)に比べて最も深い。この付近の表土は浅く、地表より35cmで岩盤に達する。

以上、筆者の調査し得た昭和37年6～7月の出土火葬墓7基についてその概要を述べたが、何分とも破壊に伴う応急的な調査であるから、極めて不備なものである。加えて足掛け10年の歳月は、鮮明な記憶を失わせてしまった。報すべきことはまだあったかも知れぬが、今はただ省略に従うの他はない。(古賀)

(3) 遺物の概要

A号火葬墓出土遺物(第13図6) 高台付壺形土器である。上半部を欠失している。底径13.6cm、胴部最大径25.8cmを数える。厚さ0.5cmの壺形土器に、厚く丸味のある高台が若干外開きに貼付けられていて、力強さを与えている。胴部外面には荒い刷毛目調整痕が残っている。刷毛目の下は、高台、底部ともに横なでされ、内部では底面はたてなで、胴部はよこなでされている。器体は黄褐色を呈し、砂粒の少ない良質土を使用した土師器である。

B号火葬墓出土遺物(第6図) 高台付壺形土器と蓋に使用された杯がある。壺形土器は高さ31.4cm、口径約12.4cm、底径12.5cm、胴部最大径29.6cmを数える。頸部は垂直に立上がり、口唇部で外方に若干突出する。肩は丸くなだらかで、高台は厚く外開きする。口頸部はよこなでされているが、頸部外面に格子印文が残っている。高台はよこなでされ、胴部外面は細かな格子印、内面には青海波文とは異なった不整形な印文が残っている。黒灰色を呈した須恵器で、口縁部及び底部は硬く焼きしまっているが、胴部は若干軟らかい。

この蔵骨器に蓋として使用された杯は高さ約4.3cm、口径16cm、底部13cmを数える。灰白色をした軟質の須恵器である。

D号火葬墓出土遺物(第11図12・第12図5・図版7-5) 長胴の瓶形土器と土師皿が出土している。瓶形土器は頸部を打欠いている。残存高22.9cm、底径12.6cm、胴部最大径18.8cm。器壁は叩き成形ののち横方向の刷毛にて調整している。器面の一部に叩き文が残っている。内底には青海波文が残っている。黒灰色を呈した硬い須恵質の長胴の瓶形土器であろう。

蓋に使用された土師皿(第11図12)は高さ2.6cm、口径15.8cm、底径11cmを数える。

底部は寛切りされ、その他は、よこなでされている。厚い底部に比べ口縁部にかけは薄くなる。瓶形土器の頸部を打欠いていることを考えれば、この土師皿が蓋として使用されたととしてよいであろう。

E号火葬墓出土遺物（第13図1・3・図版7-7） 瓶形土器とその蓋に使用された柄とがある。甕は高さ27.4cm、口径15.2cm、胴部最大径24.6cmで、底は丸底である。口頸部はよこなでされ、肩部内外は叩きののちよこなでされている。器体の内外は格子叩きと青海波文が顕著に残っている。肩と胴部にかけて濁緑色の自然釉がかかっている。灰色を呈した硬い焼きの須恵器である。

胴部最大径26.5cm。短い頸部は若干内傾気味で、ゆるやかに張り出す肩・胴部を引きしめている。径の大きい底部は安定感を与える。口頸部及び肩部の内外はよこなでされている。底の内外はたてでなでされ、底から2.5cmの胴部はよこなで、その他の胴内外は叩き目文が残っている。茶褐色を呈した軟質の須恵器である。

蓋は残存高2.2cm、口径18.6cmで、口縁部が内折しているが力強くはない。中心には握がつくのであろう。灰白色を呈した焼きの足りない蓋に使用された柄は高さ8.1cm、口径16.3cm、底径9.8cmを数える。高台は外方に開き気味で先端がさらに突出する。杯部は深く、口唇部は丸くおさまられている。内底中心部にたてでなでが認められその他はよこなでされている。底面は

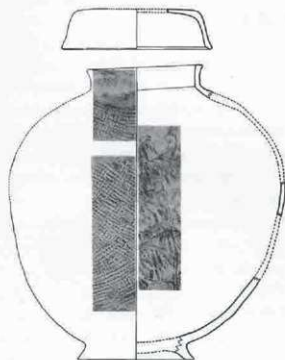
寛切りの痕を残している。軟質の黒灰色を呈した須恵器である。

F号火葬墓出土遺物（第12図3・図版7-6） 壺形土器と蓋とがある。

壺は高さ23.7cm、口径10.3cm、底径14.6cm、須恵器である。共伴の壺形土器とは異質のものである。

G号火葬墓出土遺物（第13図5）

壺形土器である。底部を欠失しているが、復元高19.3cm、口径13cm、胴部最大径21.1cmを数える。口縁部は厚く外反する。口縁部の上面する部分に細かい篋状の工具で整形した痕跡が認められる。頸部外面はよこなでされ、肩・胴部は刷毛にて整形されている。肩部内面はよこなで、



第8図 B号出土土器断面図

胴部は斜め上方になであげられ、胴部から底部に変化する部分はよこなでされている。灰褐色を呈し、砂粒の少ない良質土を使用している。

全体に丸味のある土師器である。

その他の遺物（第12図1・図版7-4） 市立南筑高等学校生徒の採集によるもので、出土状態は不明である。口頸部を打欠いた壺形土器である。現存高19.3cm、胴部最大径23cm、底径11.8cmを数える。肩部に1条の凸帯がめぐらされ、肩部と胴部を界する突出は貼り付けによるものである。底部には短い高台が貼り付けられている。内面は青海波印きののちよこなでされ底面はたてなでされている。

外面は頸部から肩部の突出までよこなで、胴部はたてよこに匳けずりされている。黒褐色の須恵器である。（宮小路）

3. 昭和45年度の調査

(1) はじめに

今次調査の端緒となったのは、市経済部林務課が南に近接する森林公園の駐車場造成によるものである。工事中折りから埋蔵文化財分布調査中の高良大社古賀寿・県教育委員会渡辺正気・市教育委員会塚本直次等によって遺跡の破壊が確認された。教育委員会は急きょ工事担当課に工事の中止を申入れ、遺跡の保存について協議したが、既に火葬墓が営まれていると思われる地域の3分の2が消滅していたこと、及び森林公園の利用が年々増加する中で、市民から駐車場建設の要望が強いことなどにより本遺跡の消滅はやむをえないものと考えられた。したがって、遺跡記録保存のため緊急に発掘調査を行なうこととなったのである。

調査担当者

福岡県教育委員会文化課

渡辺正気

〃

宮小路賀宏

久留米市教育委員会社会教育課

塚本直次

〃

樋口一成

庶務担当者

調査補助員

福岡教育大学学生

晃 治、 鹿島英世、 光枝房敏、 中尾徹

なお、調査にあたって久留米市立南筑高校歴史部諸君の参加協力があった。記して謝意を表する。(樋口)

(2) 遺構・遺物の概要

今回の調査で明らかとなった遺構は火葬墓6基と土壇墓2基である。

1号火葬墓

遺構(第7図2・図版2-1)

地中に小土壇をほり、小石室をつくって、蔵骨器を安置していた。しかし、3月の発見当時、すでにブルドーザーで地表20~30cmを削平されていたので、石室の上半の状態は不明である。遺存部の構造は、1枚の底石を置き、4辺にそれぞれ1~2枚の小板石をおいて方形の小石室をつくっていた。西南の1辺のみ原位置をたもち、他の3辺は、恐らく今回のブルドーザー工事によって、それぞれ上端部を外方にひろげられているように見うけられる。したがって、本来は20cm平方ほどの石室であったと思われる。石室の高さは、遺存部で13.5cmであるが、埋納の蔵骨器の壺を復元してみると、はるかにその倍をこえるので、そこから推定せざるを得まい。そうすると、石室は1枚の板石ではすまされず、もっと上段を構築したであろう。

石室内には、小骨片が木炭末と土にまじってつまっていた。その中心に、胴長の越州系の壺が安置されていた。しかしこの壺もブルドーザーによる破壊のため、下半部をのこし、上半部はすべて破片となって散乱していた。この残存底部の真中には小さい穿孔があるが、その真上に、越州系の鉢の底部を含む破片がおかれ、さらにその上に土師器杯のやはり底部を含む破片が、あたかも重ねあわせた姿で発見された。しかし、その後、発見遺物を復元してみると、上記の鉢と杯はいずれも壺の頸部内径より大きくて、入れることができない。したがって、本来どのようにおかれていたか、すこぶる疑問が生じた。考えられることは、胴部から上下にわたった壺の下半の中に、まずこれらの鉢・杯を安置して、その上に人骨をおさめて、しかるのちに上半を置いたことである。このような例は、昭和43年に筑紫野町の武蔵寺経塚においてみられたものである。

しかし、上記の壺内の底部に、青磁鉢、土師杯がつみかさねた姿をしているが、本来完形をつみ重ねたものであれば、ブルドーザー削平後でもなお、壺の下半がかなりよく遺存していた状態を考えると、発見当時の青磁鉢・土師杯のつみ重ねた状態は、偶然とは言えない姿であるが、やはり2次的なものであると考えられる。すなわち鉢・杯とも、底部はあるけれども、

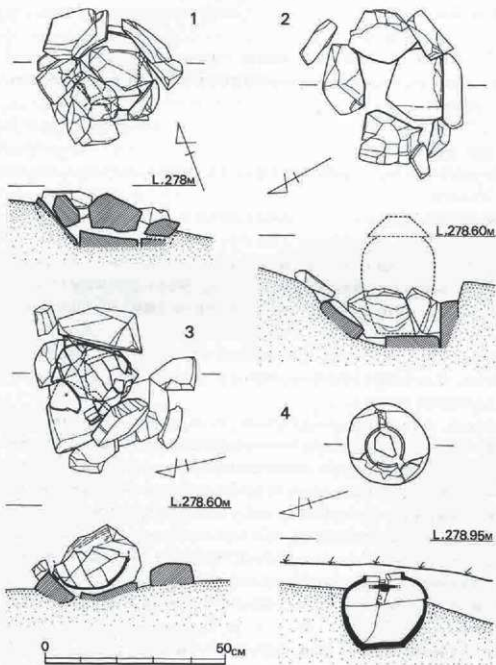


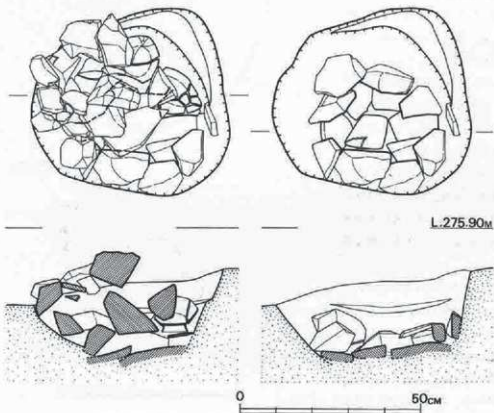
圖 7 火葬墓実測図 (1-4号, 2-1号, 3-3号, 4-2号)

いずれも一部の破片しか存在していなかったからである。とくに青磁鉢の大きな破片が、壺下半部の外から発見されているのである。石室の基部の板石さえ、3辺とも動くほどの変改を受けてもいるのである。

したがって、青磁の鉢と土師杯は、むしろ壺の蓋であったものが、偶然にも上記のように外力によって転移したのではなからうか。しかし壺内の骨片と木炭末を含む土砂の充填の中での発見は、なお釈然としないものをのこしている。

遺物(第11図8・第12図4・図版7-3) 嗣長の越州系の壺は、多くの破片にわかれていて、これらを復原しても、肩部下半の部分が全くなくて口辺から肩にかけての一部と、底から胴上にわたる部分とが接合しない。しかし器壁のカーブから大半の姿は容易に想像できる。

すなわち、外開きの広くて短い口頸に、ずんぐりふくらんだ胴部がついている。底はあげ底である。胎は灰青の須恵質である。器壁の内外にろくろでひきあげた大きな横走の凸凹が、明瞭である。器の内外に釉薬がかけてある。外側は、底を上にして、すくなくとも、5-6回ま



第 5 図 5号火葬墓実測図(右は覆石を取った後)

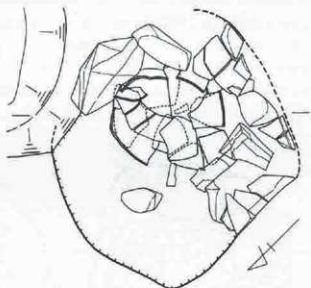
ずオリーブ色の釉をかけている。そのうえに肩から胴上半の部分にかけて、3ヶ所、等間隔に褐釉をかけている。なお、頸部のつけ根から胴上半にかけての一部分、全面的になまこ釉がたれさがっている。器の内壁は、底まで全面にチョコレート釉がぬられている。底部には、まるい径約1.8cmほどの、外底からの2次的な穿孔が真中にうがたれている。

さきに埋葬時に上下にわれをいれていたことも書いたが、現在不足の分が多いうえに、残存片も20数片を接合したわけで、当初のわれがどれであるかなどは勿論定かでない。

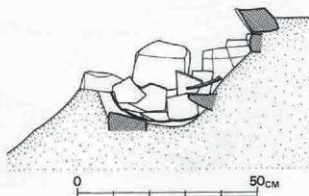
越州系の青磁鉢は、いま、全体の2～3割ほどしか残存していないが、底部から口縁まであって、全形がよく推想される。底は平たい高台から、ただちに口縁にむかって、軽快に開く鉢である。恐らくけずり出しの高台であろう。

きれいで透明な青磁釉がうすく、内面全体と外面は高台付近までかかっている。きわめて精選された胎で、高台から底うらまで実になめらかである。目は本来8～9個と思われ、残存部分の見込みと高台とともに5個ずつみられる。内外とも一部分貫入がある。

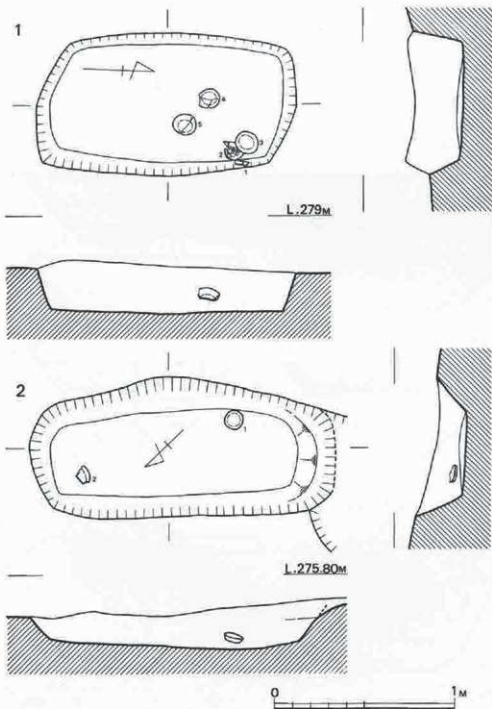
壺の中で発見された土師器の杯は、口径約12cm、器高3.4cm、底径6.5cmの通例のものである。内面は底部の中心部のたてなでをのぞいては、すべてよこなでしている。外面も口唇から底部のつけねまで、よこなでし、底裏は篋切りのあとにたてなで様



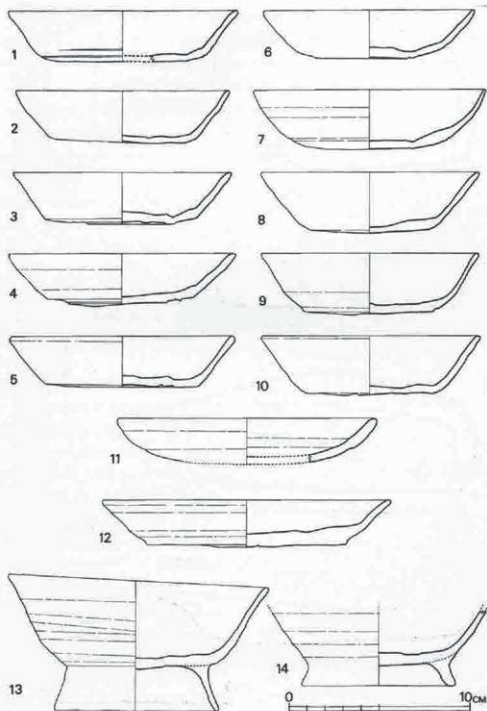
L. 275.40m



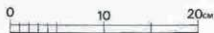
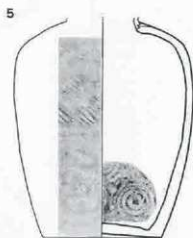
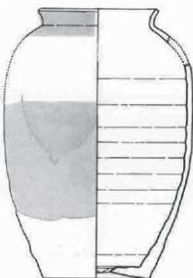
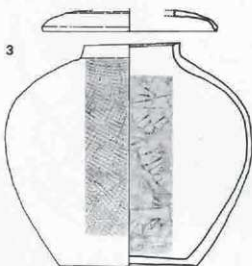
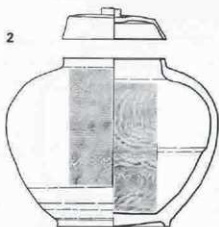
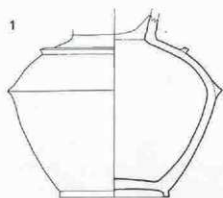
第 9 図 6号火葬墓実測図



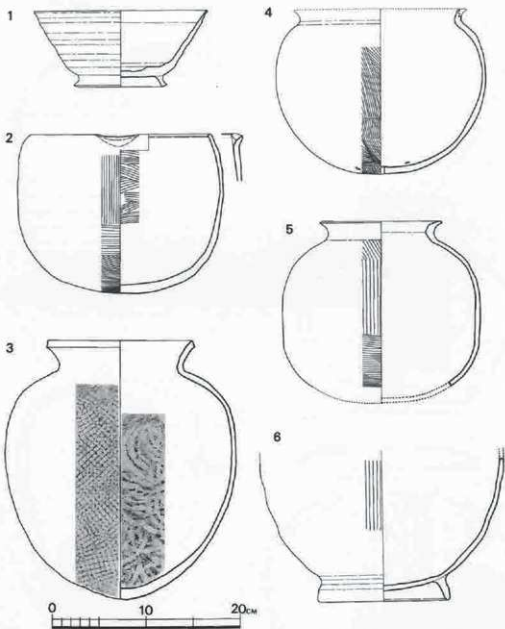
第 18 圖 土拉墓実測図 (1-1号, 2-2号)



第 11 圖 土師器実測図



第 12 圖 出土遺物実測図



第 13 图 出土遗物实测图

の状態が一方に整然とある。器壁は底部から口縁へ比較的すんなり開いている。胎土は精選された水こし粘土である。灰白色を呈する。

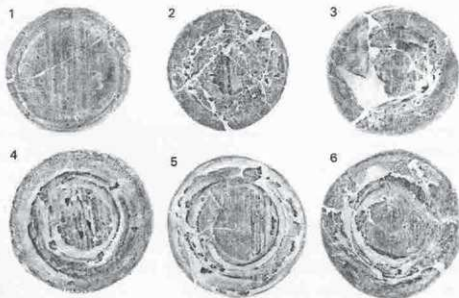
なお、この1号墓の周辺から、胎土の精選された同様の土師杯片の1～2個体分が発見されている。そのほか、胎土の若干おちる黄褐色の同様の杯片が2片あり、その底部には、上記のたてで状のものではなく、へらおこしのままである。その外、赤やきの外面にたたきのある須恵器小片もある。(渡辺)

2号火葬墓

遺構(第7図4・図版2-2) 地表下2cmで肱骨器口縁部が現われるほど浅くして発見された。厚さ約7cmの表土をはぐと、片岩・パイラン土となり、この層を掘り込んで肱骨器を埋置しているのであるが、その掘り方は識別できなかった。

遺物(第12図2・図版7-2) 壺形土器と蓋が発見された。壺形土器は高17.9cm、底径12cm、口径10.8cm、胴部最大径22.6cmを数える。

高さ1cmの短い口縁部は、若干内傾しているが肩・胴部の張りを力強く引きしめている。肩部の張りに比べ胴下部は丸味を帯びて下がり短い高台となる。高台は貼り付け高台で、よこなでされている。高台内の底部及び高台から胴部にかけての4.5cmまでは匳けずりされている。口頸部の内外はよこなで、胴部外面は細かい格子叩きののち荒い刷毛でよこなでされ、胴部内



第14図 土師杯底部拓影(1-1号, 2-5号, 3-1号土坑墓No2土器,
4-1号土坑墓No3土器, 5-1号土坑墓No4土器, 6-1号土坑墓No5土器)

面は青海波文印きののちよこなでされている。底部内面はたてなでされている。

全体に暗茶褐色で、胎土は茶褐色の良土を使用している。

壺形土器と組みで使用された蓋は、総高 3.9cm、口径11.2cmの須恵器である。頂部には偏平な揃みが貼り付けられている。全体によこなでして整形されている。この蓋と壺は同質のものではない。

3号火葬墓

遺構（第7図3・図版3-1） 地表に近いので相当破壊を受けている。本来は小石室を作り、天井に蓋石を持つものであったと考えられるが、北側・天井部にかけて、石材が失われている。床を作る3個の石は、蔵骨器の底部曲線にしたがって配置されていて大変配慮された様子がわかる。今、東・西の側壁が遺存している。小石室に安置された蔵骨器は、土師壺形こしきとその蓋に使用されたと考えられる土師皿がある。

遺物（第11図11・第13図4） 壺形土器はこしきで、底に5つの穿孔がある。口唇部を欠いているが復元口径18.4cm、復元高17.5cm、胴部最大径22.4cmである。

外反する口頸部と胴部の曲線は大変丸味がある。肩部・口縁部・胴部内面の下半にかけて、よこなでされている。胎土は若干砂粒を含み、内面は灰黒色、外面は黒褐色に焼成している。

底面の穿孔は、中央の1孔を中心に対角的に4孔が穿たれている。孔の径は約8mmである。

蓋に使用されたと思われる土師皿は、復元高 2.6cm、口径12.2cmを数え、風化が目立つ。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を若干含んでいる。

4号火葬墓

遺構（第7図1・図版4） 片岩バイライン土層を掘りくぼめ、床石3枚を敷き、側石を立て、天井に2個の石を置いて蓋石として小石室を作っている。石室内には若干の骨片と炭・灰がつまっている。小石室の大きさは、南北約20cm、東西約20cmである。天井石は、埋葬時から比べて沈んだものようである。

蔵骨器の発見はないが、天井石の沈みを考えれば木製の容器が使用されたのではないだろうか。

5号火葬墓

遺構（第8図） 円とも方形ともつかぬ穴を掘り小石室を造っている。6枚の床石を敷き偏平な石を側壁としている。石室のプランは不整形であるが、15×15cmの大きさと考えられる。この火葬墓も第4号火葬墓と同様に木製の蔵骨器を使用したものと思われ、天井部の石が落込んでいる。この火葬墓には、土師杯と椀が副葬されていた。

遺物（第11図9・13・図版6-3・4） ①は土師杯で、南に接して出土した。口径12cm、底径 7.2cm、高さ 3.4cmを数える。内面の口唇部から底部の一部にかけてはよこなでし、底部はたてなでしている。外面は口唇部から底部までの壁面はよこなで、底面は荒切りしている。なお、底面には乾燥台によるものかと考えられる巾約2mmの簾状の圧痕が認められる（第14図

2.)。

13は高台付きの碗である。杯部が不整形であるが総高 7.5cm、口径14.5cm、底径 9.1cmを数える。薄くて高い高台は貼り付けで、内底径3cmの範囲はたてで、その外は全てよこなでされている。9・13ともに茶褐色を呈し、砂粒の少ない良質土を使用している。

第6号火葬墓

遺構(第9図・図版3-2) 第2土壇墓に一部破壊されている。穴を穿ち、大小7個の扁平な石材を床石として拉底に敷き、同様の石材を側壁として小石室を作り深鉢形の蔵骨器を安置している。蔵骨器の壺となるものの発見がなかったが、これは腐食しやすい木製のものだったと考えられる。

遺物(第13図2・図版7-1) 片口の深鉢形土器である。

高16.9cm、口径19cmを数える。丸底の底部から器壁は丸味を持って若干内傾しながら立ち上がっている。口唇部は丸くおさまられ、内側は若干凸出する。片口部は若干厚く、外方に折りまげられている。外面は、口縁部から 2.3cm下から全面に荒い刷毛目が縦横に認められる。内面は、底面はたてでし、口縁部から下半にかけて荒い刷毛目が交互に残っている。底面と刷毛目との間はよこなでされ、口縁部の内外はよこなでしている。外面は茶褐色、内面は黒灰色を呈し、胎土は砂粒を若干含んだ粘土を使用している。

1号土壇墓

遺構(第10図1・図版5-1) 長方形プランの土壇墓である。長さ 144cm、巾80cm、下面長さ 129cm、巾66cmで、深さは約27cmである。北東半に土師杯5個が副葬されている。

遺物(第11図) 1～5は遺構実測図番号と一致する。全て土師杯でその手法も同一である。口径11.8cm～12.8、高 2.8cmと大きさにおいても同形と言える。内底面はたてで、器壁内外はよこなで、底部は篋切りし、簾状の圧痕が認められる。茶褐色を呈し、砂粒を含みぬ良質土を使用している。

2号土壇墓

遺構(第10図2・図版5-2) は長方形プランの土壇墓である。長さ約152cm、巾17.5cm、下面での長さ 138cm、巾46cm、深さ28cmを数える。壇内には2個の土師杯が副葬されている。

遺物(第11図) 6は遺構実測図中のNo.1土器である。口径11.5cm、高さ 2.7cm。7はNo.2土器で、口径12.7cm、高さ 3.3cmを数える。その手法は前記土師杯と同様である。しかし器壁が口縁にむかって内湾気味である。(宮小路)

4. 西谷火葬墓の歴史的背景

西谷火葬墓群は、高良山の主峰毘沙門岳の山頂に近く営まれたものであるから、山中に鎮座する京後一の宮高良大社（式内名神社・高良玉垂命神社・旧国幣大社）と密接な関係を有するであろうことは、容易に首肯されるところである。まして同社が御祭神を「高良大菩薩」と称し、仏教との習合古く且つ著しいものがあるに於ては尚更であろう。

今、高良大社の創祀については詳かでないが、同社と仏教の接触を物語る資料として、石清水八幡宮記録中の『諸縁起』所収「高良縁起」を挙げる事が出来る。この縁起は「高良大菩薩御託宣文」と「高隆寺縁起」とから成っているが、「高隆寺」は申すまでもなく高良社の神宮寺である。

これによると、天武天皇即位2年癸酉歲（673）2月8日、「高良大名神宮」の神部物部道麻呂の男子美乃理麻呂に神懸りして、高良神は仏教帰依の託宣を下された。即ち

爰及于第廿代主天國押開庭庭命御宇、仏法初来、布行天朝、我在百八十神之中、
依玄孫大臣物部大連之訴、今未信仏法、爰去正月十五日夜中、斗數比丘論舉来云、
天下万法終帰仏海者也、当社明神豈独爾哉、即誦仁王般若偈句、吾今聴之、初
発菩薩之心、新嘗仏法之味、嗚呼哉、外裏二季之祭祀、雖掃神威、内薰三熱之毒
煙、區避業道、若為我有志之人、建立精舍於此林、興行仏法於万代、吾成護法檀
那、承事仏陀、摩娑僧伽

というのである。ここに於て国家道俗力を合せ、精舎・僧房・雑舎を建立して、弥勒仏、毘沙門天・大名神の像を安じ、「大神宮寺法名高隆寺」となしたと記されている。勧進僧は「入唐学問神泰和尚弟子僧隆慶」であった。しかし、この縁起にいう天武天皇即位二年が、神宮寺創建の年として古きにすぎことは指摘するまでもなからう。太田亮氏は石清水文書『宮寺縁事抄』により、御託宣状を天平勝宝六年（754）の成立かと推定されたが、縁起自体の成立はともかく、考古学上の知見よりしても、仏教の高良山入山の年代は奈良後期近く遡るようである。

神宮寺高隆寺の址は西谷火葬墓群の西北方 1.1km、現高良大社社殿からは西北方 200mの地点、字高良山の内「安在地」に遺っている。寺地と覚しき上下二段の削平地には自然石の礎石の露出するものがあり、付近から都府樓采鬼瓦、七弁の蓮花文軒瓦、唐草文軒平瓦、六角形の瓦塔屋根の断片等が採集され、奈良後期、遅くとも平安の初期には瓦葺の堂舎が営まれていたことが明らかである。『高良玉垂宮縁起』はこの高隆寺をもって神功皇后異類征伐の御願寺であるとし、天武2年の託宣により弥勒寺・先三昧堂・新三昧堂・宝塔院・正覚寺・観音寺・薬師寺・勢至堂（本地院）のいわゆる「八ヶ寺」が、法体聖人（隆慶）の手で建立されたように記している。これらの寺は皆な高良神社殿より下方、即ち西方の山中に営まれたものである。

ところが、毘沙門岳の西に長く延びて本社⁹⁰の社背に達する尾根は「杉ノ城」と呼ばれ、その名の示す通り東部に中世山城の遺構たる土塁・空濠を囲らしているが、ここから布目瓦の出土することも早くから知られていた。筆者の実見したものでは、斜格子こう打文の平瓦断片があるとすれば、平安時代には高良神社殿より上方に瓦葺の小堂宇が営まれていたことが推察される。『高良記』⁹¹いうに高良神最初の鎮座地「住厭」は、即ちここであろう。

又毘沙門岳の西側の谷を「毘沙門谷」と呼び、その東側の斜面に高良大杜奥宮（奥の院）がある。此処に古くは陸奥上人建立と伝えられる毘沙門堂があり、毘沙門岳・毘沙門谷の名が起ったと伝えられる。更に『高良記』は、この毘沙門堂の前に戒壇が設けられていたとも記している。由由しいことである。

奥宮は幕政時代までは高良大明神の御廟所と称していた。現存する石鳥居の額にも「高良廟」とある。正面の石造宝塔は、神仏分離以後塔身が改造されているが、屋根の特徴から、室町期の造立と認められる。陸奥上人が天竺無熱池の水を迎えて流したと伝える清水は、今も湧れることなく湧出している。

今日でも毘沙門岳山頂の北斜面を「別所」と呼んでいるが、これは戒壇の在所に因る地名と『高良記』は説明している。高良社乃至神宮寺の「別業」の意であろうか。西谷火葬墓群はこの「別所」の北端に営まれているのである。

毘沙門岳の山頂は中世の古城址である。この城は「毘沙門岳城」「別所城」とも呼ばれ、征西將軍宮懐良親王の高良山征西府の址とする説がある。森林公園内に切通し、土塁、空濠等の遺構がよく保存され、山頂より南の尾根に「城ノ平」の地名が遺っている。

特に興味深いのは別所の付近に「経納」、更にその東方の尾根に「経塚」という地名があったことである。

これらは高良山の別業＝別所を中心とする仏教文化の遺称と考えられる。

又、別所（火葬墓群付近）から山本町に下る山道は「比丘尼道」と俗称され、その谷間に放光寺の址がある。この寺は第25世の高良山座主嚴琳権律師が、承久2年（1220）門弟嚴真権律師をして建立せしめた寺である。

放光寺址の東方 500m 山本町豊田字小寺西山からは、奈良末～平安初期の火葬遺骨器2個が出土しているが、その東北 450m の正福寺址から、施入記録の書きさされた奈良期の須恵器杯破片を採集したこともある。更に東方 600m には、奈良後期より南北朝までの古瓦を出土する永勝寺があり、古代末～中世の火葬遺骨器が発見されている。

西谷火葬墓群は、前に見た如き高良山に於ける山間仏教の盛行を背景としているが、特にその初期に、営まれたものである。従って、被葬者も神宮寺高隆寺、及び、その配下の寺院に属する僧侶であったと考えて大過ないのではあるまいか。

一方高良神は延暦14年（795）従五位下に叙せられており、以後 100年間に極位に達し、式

内名神社に列している。西谷火葬墓群の営まれた年代が、この高良神の神階昇叙の時期とも一致していることは大いに刮目すべきであろう。いずれにせよ高良山に於ける初期仏教文化の遺産として、その歴史的価値は極めて高く評価されねばならない。

なお高隆寺開山隆慶上人の墓と伝えるものは、宇高良山の内、妙思寺墓地にあり、歴代の高良座主の墓域ともなっているが、此処には 南北朝以前に遡り得る墓の存在は認められていない。

最後に高良山周辺の古代火葬墓として、管見にふれた事例を紹介し、参考に供することとしよう。

1. 高良内町杉谷

矢野一貞の『埴原遺物略図』(嘉永5年)に見えるもので、出土地点、遺物の所在等は不明であるが、須恵器埴の図に添えて次の説明がある。

御井郡高良内村杉谷名上峰地中以石圍之、方三尺許、内有此器倒伏、其内和同銭
珍錢一枚有之、此器色紫而堅剛如石、内有満形。

「方三尺許」の石圍いの中に収められていたというので、西谷火葬墓群にある小石室を営むものと同様な構造であったろう。和同銭副葬や器内の「満形」からして奈良期と考えられる。和同銭は筑紫郡筑紫野町結浦に於て有蓋把手付蔵骨器に伴出した例がある。

2. 御井町礫山

昭和8年11月、自動車道路開鑿中、愛宕神社の東北方50m余の地点で舟型髹棺4基が発見された際、棺外で完形の須恵器埴一個が出土した。報告者はこれを髹棺の副葬品と考えたようであるが、弥生乃至古墳初期とされる髹棺とは相伴わぬ奈良期の遺物である。単独出土であるところから、火葬蔵骨器と認められよう。

他に「弥生式土器破片數個」も見い出されたというが、或は土師器の蓋であったかとも思われる。

3. 山本町豊田字小寺西山

昭和40年1～3月、筆者が実査したものである。標高150m付近の東向斜面に、上下約10m程の間隔を置いて2個の火葬蔵骨器が出土した。上方出土のものは、須恵器、下方出土のものは土師器である。須恵器は西谷出土、南筑高等学校蔵のものと略々同形で、埴の口径部を欠き取って転用している。土師器はいわゆる「鉢鉢形」で、丸底の底部に小孔を穿っている。同形の須恵器の蔵骨器は朝倉郡三輪町大塚字楠で出土しており、いずれも奈良末～平安初期の遺物と考えられる。

ここで注意すべきは、火葬墓の営まれた斜面の直下、谷間の山道近くで、長径3～3.5m、短径2mばかりの楕円形に木炭の堆積した箇所が認められたことである。恐らく火葬はこの谷

間で行われ、遺灰を蔵骨器に納めて尾根の頂き近く埋葬したものではなかろうか。附記して後考に俟つこととする。(古賀)

- 〔註〕 (1) 「高良大菩薩」の初見は『諸縁起』所収「高良縁起」である。註(2)参照。
- (2) 石清水八幡宮記録38。建保7年(1219)写本 石清水八幡宮所蔵。
- (3) 太田亮『高良山史』 昭和37年9月
- (4) 延文元年(1356)成立の『諏訪大明神絵詞』に引用された形跡があるから、遅くとも中世後期の初めには成立していたと思われる。高良大社・玉垂宮・宗崎家等に伝写本あり。
- (5) 福岡県三井郡『懐良親王と三井郡』 大正12年5月
- (6) 高良大社の縁起書の一。『高良玉垂宮神秘書』ともいう。中世末期の成立と考えられる。
- (7) 『高良山座主旧記之抄書』に「御霊廟、奉納靈神尊骸、在毘沙門堂傍」とある。
- (8) 註(5)参照
- (9) 明治年間の古地図に明記されている。今日知る人は殆んどいない。
- (10) 『高良山座主系図』(厨家本)
- (11) 昭和40年1～3月筆者実査。
- (12) 筆者採集。現品は永勝寺蔵。
- (13) 小田富士雄・露久爾郎『筑後柳坂山永勝寺の遺物』『史迹と美術』第33輯ノ2 昭和38年2月
- (14) 『日本紀略』『続日本後紀』『文德実録』『三代実録』『筑後国名神帳』(天慶7年録上、高良大社蔵)等による。
- (15) 倉富了一「高良山中座主の墓」『郷土研究筑後』第5巻4号 昭和12年4月
- (16) 篠山神社文庫蔵写本あり。
- (17) 渡辺正気「同銭廟葬の一蔵骨器」『九州考古学』1 昭和32年5月
- (18) 川上市太郎「高良山・櫻山枕付舟型磐棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯 昭和9年3月
- (19) 朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』 昭和44年11月

5. お わ り に

昭和37・45年の両年に調査された埋葬遺構は火葬墓13基と土拉墓2基である。

西谷火葬墓は、高良山頂から若干北に下った地点で、筑後平野を眼下に見下す景勝の地である。遺跡は標高275～279mの間にあり、北に流れる尾根の東斜面に所在する。

火葬墓は、火葬場所と墓地を異にするものである。埋葬法にも種々の形態があり、次の5類に分類することができる。

- I 類 小石室のみ（木製容器使用？）
- II 類 小石室内に蔵骨器使用のもの
- III 類 素掘り坑中に蔵骨器使用のもの
- IV 類 素掘り坑底に平石を敷いたもの
- V 類 土拉墓

I 類は、4・5号がこれに当る。両墓の天井石は石室の面積より小さく、なお石室内に沈んだ状態で発見された。このことは木製の蔵骨器を使用したためと考えられる。

II 類は、D・G・1・3・6号がこれに当る。6号墓は2号土拉墓に一部破かいされているが蓋の発見がない。木製の蓋の使用が考えられるものである。

III 類には、(1)素掘り土坑内に蔵骨器を納め、周囲に木炭を充填したものと、(2)木炭を充填しないものとの2種があり、前者にはA・B・E号が、後者にはF・2号がこれに当る。前者はすでに破かいされていたために、その蔵骨器の埋葬状態がどのようであったか不明であるが、後者と同様に正置していたものと思われる。

IV 類は、素掘り坑底に平石をすえ、その上に火葬骨を納め、木炭でおったものである。C号がこれで、蔵骨器は発見されないがあるいは木製の容器を使用していたかも知れない。

V 類は火葬墓ではなく、土葬による遺構と考えられ2例発見された。

蔵骨器及び副葬された遺物の器種も多様である。瓶子形長胴壺・長胴壺・丸底壺・丸底壺形のこしき・高台付壺・片口深鉢・杯・皿・鉢・高台付碗等があり、土師質・須恵質・陶質の別がある。身・蓋ともにセットをなし、当初から蔵骨器として作成されたものはない。種々の器を転用し、寄せ集めて目的に当てたものである。

蔵骨器には、底部を穿孔したものがあるが、この遺跡では1号墓にのみ見られた。なお、3号墓のようにこしきを使用したものは、この底部穿孔を意識したものかと考えられる。

副葬品はほとんどなく、わずかに5号墓及び1・2号土拉墓から土師杯・碗が発見されただけである。

さて、この西谷火葬墓の年代はどのような時期であろうか。

まず遺物において、1号墓出土の長胴壺と蓋に使用された鉢については、唐末期に作成され

た越州窯系の作品であることが考えられる。削り出し高台の鉢は、福岡市所在鴻巣館跡及び太宰府周辺で見られるものである。⁽³⁾

2号墓出土の蔵骨器は、その形態から奈良期と考えてよいであろう。

B号墓出土の高台付壺形土器は、太宰府町内山発見の蔵骨器と類似し、奈良期の年代が与えられる。⁽⁴⁾

D号墓出土の瓶子形長調壺は、白岡遺跡出土のものと類似しており、平安前期と考えられる。なお、遺構は不明であるが、南筑高校生によって採集された蔵骨器（第 図）は、熊本地方に出土例が知られ、平安前期に比定されている。⁽⁵⁾

また、蔵骨器の組み合わせが、転用及び寄集めであることは奈良末期以前に遡りえない。⁽⁶⁾

以上のことから、この西谷火葬墓群は、奈良末～平安前期にかけて営まれたものと考えられる。遺構形式においては、皿類が他より先行するようである。

火葬墓から発見された人骨については、九州大学医学部の永井昌文教授に調査をお願いしたが、焼骨が細片であるために性別・年齢については解明することができなかった。しかし、焼骨中には歯は一片も含まれておらず、わずかに火葬の後に折り取られた状態で、顎骨中に歯根のみ残存していたものが認められたとのことである。このことは特筆すべきことである。

昭和37年の火葬墓発見の時には、古賀寿氏によつて応急の記録が作成されたのみで、十分な調査もされずに破かいされてしまった。このことは行政の責任であり深く反省するとともに、無惨にもブルドーザーの下敷きになった祖先の霊が安らかならんことを祈るのみである。遺跡地は、今は森林公園として市民に親しまれている。これも歴史であろうが、ここで憩う人々はここが先人の安住の地であったことを記憶すべきである。（渡辺・宮小路）

註1 小山富士夫氏にご教示いただいた。

2 小田富士雄「白岡遺跡」第3章・第3節・86頁、別府大学上代文化研究報告（1）、1958。

3 小田富士雄「前掲書」第2章・第3節ー7

4 赤師見国・三島裕「鉢及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」3 遺物に対する考察・

1 蔵骨器、（人類学研究第7巻1～2）1960。

「城南町史」146頁、城南町史編纂会、1965。

5 註1に同じ。

圖

版



1. 遺跡遠影



2. 遺跡近影



1. 第1号火葬墓



2. 第2号火葬墓



1. 第3号火葬墓



2. 第6号火葬墓



1. 第4号火葬墓



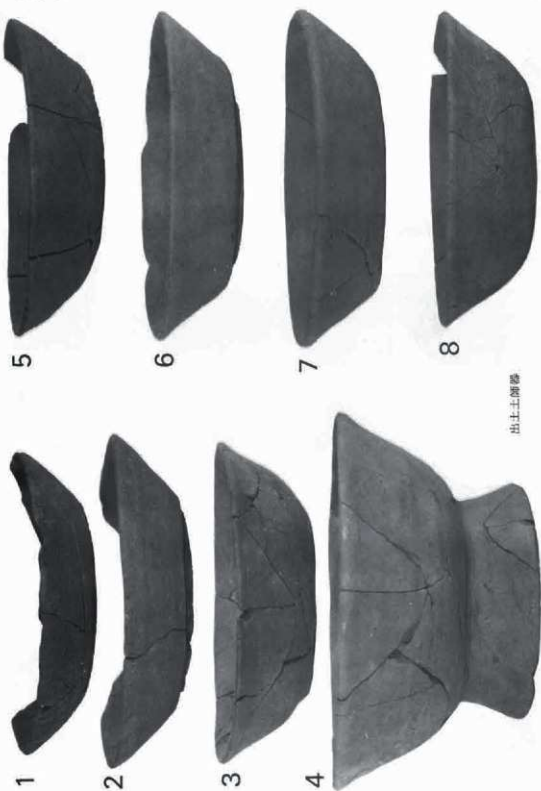
2. 第4号火葬墓（床石を出した状態）



1. 1号土坛墓



2. 2号土坛墓



出土土陶器



出土藏骨器

久留米市文化財調査報告書 第3集

昭和46年3月31日

発行 久留米市教育委員会

久留米市岡替町1

印刷 (有) 猪飼プリント

久留米市東和町6の18